

白い月・五代アイの生涯

福田 かよ子

源流近くの谷間に茶屋

平成二十六年十月七日、その日から朝日新聞の夕刊は『旅人、山へ』というコーナーを設けて、シリーズで掲載し始めた。先ず第一回は次のような書き出しだった。

《鈴鹿山脈の源流近くに茶屋も出来るほどにぎわった茨川（あつがは）という集落があったそうだ。…愛知川（あいちがは）の源流が茶屋川と名を変えらるのもこの茶屋に由来する。にぎわったのは戦国時代だという人もいれば明治維新の後、薩摩閩で大阪財界の重鎮五代友厚が近くに銀採掘権を得た頃にもあったという人もいた。》

「えっ」

私は驚いた。書かれている所は私が四十年前に住んでいた実家から三キロと離れていない、あの青川の上流のことではないかと思っただからである。

四十年前、当時二十代だった私は五月の連休に三人の登山仲間と員弁郡（現いなべ市）治田の青川峡谷に沿って歩き始めた。しばらくして出くわした隧道に、

「どうしてこんな所に隧道が…」

と訝しく思い、キツネにでも騙されているような気がしたものだ。暗い穴の中を出口の明りに向かって通り抜けると、三角州に出来た広場があった。どうも人為的なにおいがして、不思議な感覚が付きまとった。そこから山道に分け入ると、やはり朽ちた祠があり、側の五十センチ位の二つ並んだ石の前には、白い陶器の花入れが供えられていた。

通り掛かった中年の登山者が

「昔、ここに鉱山があって、落盤の下敷きになった坑夫の墓だという話ですよ」と言っ、手を合わせて通り過ぎて行った。

人々が往来した山道であることは草木

の枝の形や、踏み込まれた根の歪みから分かった。二時間ほどで登りつめると標高七七〇メートルの治田峠に着いた。

若狭湾から太平洋側の伊勢湾に通過するジェット気流の影響からか、稜に立つと特有の強い風が滋賀県側から吹き上げて来た。そこから転げるように下ると、大きな柿の木を残す集落の跡があった。分校だったと思われる建物の中に、かすかに赤や青の原色が残る小学生の教科書が散乱していた。近くの沢には陽に照らされたワサビの葉が揺れて、欠けた白い飯茶碗がのぞいていた。

そこが伊勢と近江を結ぶルートで、朝日新聞に記載された茨川の茶屋だったのだ。記事は続いた。

《鈴鹿山脈から西側に流れた水は、琵琶湖を経て瀬戸内海に流れこむ。分水嶺を意識したことがなくて、初めて知ったときには随分、意外な気がした。》
さらに読み進めると

《茨川は帝政ロシアにおけるウラジオストクのように『東を制圧する』為の集落と位置付けてよさそうだ。》

と記されていた。

歴史をひもとくと、確かに豊臣秀次は本能寺の変の後、柴田勝家と結んだ伊勢の滝川一益を攻めるのに、天正十一年正月、奇襲攻撃に出た。二万五千の軍勢は近江の君ヶ畑を通り茨川に伝い茶屋を抜けた。そして兵は治田峠を駆け上り、青川峡谷沿いに下って、ついに伊勢、桑名、長島を手中にしたのだという。

藁草鞋にかんじきを付け、槍を持った若い兵士達が深い雪をおして峠をよじ登る、その喘ぎか坤吟か、正体の分からぬまま、何かが私の脳裏でざわめいた。

さっそくパソコンを開け、茨川、茶屋、鉾山とネットサーフィンをして再び驚いた。

治田鉾山で銀、銅の採掘を最後に稼業としたのは五代友厚ではなくて『女ヤマ師・五代アイ』と出ているではないか…。

治田鉾山

平成二十七年正月を過ぎた日に、新聞の記事を思い出して小雪のちらつく治田を訪ねた。

巡見街道の青川橋を左に折れて錆色のスギ林を抜けると、ピラミッドのように削平された土手が現れ、水をたたえた池が目前に広がった。堀なのか、灌漑用の

溜め池なのか、苔色の水面は鉛色の空に包まれて沈黙していた。

周りの小高い山には、木枯らしに擦れた熊笹が覆い被さり、白い雪が谷あいには滑り落ちていた。看板に、「治田城跡」永祿年間（一五五八年から一五七〇年）戦国の武将桶正具が居城したと書いてあった。

この地は昔から全国でも有数の銀や銅が産出された所である。元祿の再興といわれて大繁盛を極めた時代には、坑夫の数は多い時で六百余人にも及んだという。私は女郎屋などが置かれたという記述を目にした時、泥濘の鉾山に売られてきた若い娘達の一筋の赤い腰ひもを解かれる姿が想い浮かび、女の哀切を感じざるを得なかった。

徳川家康の孫、千姫が桑名城主、本多忠刻に嫁する時は治田鉾山が化粧料として充てられ、寛永の時代には、ここに徳川幕府の鉾山奉行が置かれ、陣屋が設けられていたそうだ。

今登って来た道を振り返って眺めると、五代アイが鉾山を興すために東京から移り住んで、東京オリンピックの年まで五十年近くを居住した敷地が見えた。庭の

一角には当時のアイが植えたという、老成した梅の木が立っていた。

珍妙な形の手水鉢

近くにあった新町神社の大きな鳥居をくぐると、境内に二メートル位の大きな石臼が鎮座していた。これは豪雨の時に鉾山から堰に流れ着いたものを、神社に手水鉢として奉納されたものだそうだ。石臼の上で鉾石を敲いて銀や銅を取り出す比重選鉱に利用されていたようである。

珍妙な形の石臼を見つめていると、だんだんと玄能を打つ音が聞こえてくるように鉾山の話が真実味を帯びてきた。

足元の茶色い石を拾い上げると割れ目から黄銅鉾がチカチカと光った。金臭い思いに付きまともわれながら、池に戻った私は手にしていた石を土手から放り投げた。静かな湖面に銀色の大きな波輪が広がった。

「キリッ」 「キリッ」

静寂をついて突然、二羽のカイツブリが鳴きながら山の方に飛び立って行った。

『女ヤマ師・五代アイ』の父

アイとは五代藍子のことである。父は大坂経済の発展に貢献した五代友厚であ

る。同じ時代に活躍した西郷隆盛、大久保利通と深い親交があり、その二人と並び『薩摩の三才』と呼ばれた人物である。

時代はペリーが軍艦を率いて浦賀に入港した後であった。そんなおり、友厚は高杉晋作等と共に上海視察に赴いた。そこで早々とドイツの蒸気船を購入して当時の新聞を驚かせた。この頃から友厚の凄腕は数々の事業を創設して大阪経済の礎となり、東の渋沢栄一、西の五代友厚といわれるようになっていった。

余談ではあるが、治田の鉱山奉行に關わった岡田家は宝暦年間に分家して四日市に移住した。子孫の惣一郎は五人の友達と万古焼の急須を売って資金を作り、徒歩にて東京に出かけた。その時の記述を紹介すると

《明治三十五年七月二十二日に遂に我等が今の大旅行の最大の目的たる実業家の渋沢栄一先生との面談かなえる。その間わずか二分余りといえども、門衛の制するを払い、我等身分と経歴を唱和し我等尊仰する産業指導者の渋沢栄一先生に面談のため四日市より徒歩にて来りしを告げる。先生一言なかりしも、我等

一人一人と握手を交したり。この感激を如く何に伝えん。〔記岡田〕

惣一郎はこのことに、いたく感激して後々の商魂を磨いていった。小売業界で日本一となったイオングループ総帥の岡田卓也氏とパラミタミュージアム名誉館長の小嶋千鶴子様のお父様である。

貨幣改革

友厚は白い愛馬にデンマークから贈られた銀の鞍を付けて跨り、堺は浜寺の松並木を散歩していた。その昔、参勤交代で通り掛かった紀州の殿様が「千両を出しても惜しくない」と言つてうなつたという見事な松を見て、予てから憂慮していることが思い浮かんだ。いかに千両の大金といつても、藩ごとの貨幣で品質が乱れていては経済を立て直すことが出来ない。早急に貨幣

の価値を統一する必要があると考え、中央の大久保利通や大隈重信、岩倉具視らに進言していった。

数年がたったある日、友厚は天満橋の欄干にもたれて、新しい造幣寮の煙が青い空に一直線に立ち昇る様を感慨深く眺めていた。そこに通り掛かったのは両替

屋の九里正三郎であった。そこですぐに相談を持ちかけた。

「良かどこで出会つた…、土地のことで頼みがあるのだが…」

「どないしやはりましたか、五代はん。べっぴんさんでも困うおつもりでつか。薩摩の人は芋堀りと、戦っただけしかできんと思つてましたが…」

茶化した九里であったが友厚の真意を聞き先見の明に感心して、今宮の別邸を提供した。

友厚はさつそく、イギリスの商人グラーバーから機械を購入し、金銀分析所を創設して全国の藩から金、銀、銅を集め始めた。

時代はチョンマゲを落とし、散髪脱刀令が出た直後で、すぐに武士から刀が集まった。

「よしっ、これからは鉱山だ…」

友厚は自分に言い聞かせるように拳に力を込めた。明治の初め、全国に約百四十余ヶ所の鉱山を次々と継承、開坑して鉱山王としての道を極めて行くのであった。

藍子の母・勝子

友厚邸の敷地は百間四方もあった。大

きな鉄門の中にある馬車は、わざわざロンドンに注文して作ったもので、黒塗りの箱型に五代家の紋章『抱香葉』が燦然と異彩を放っていた。敷地の端には三軒の仕舞屋が建っていた。そこには芸者をひかせた吉田多喜を囲い、二軒目は早世した小松帯刀の愛人と子供を住まわせていた。もう一軒は友厚が新町の芸者をひかせた女、宮地勝子の家であった。

雨も止んだ昼下がり、友厚は馬場で若駒を乗り回していた。そこへ文金島田に結った一七、八歳のみずみずしい美少女の勝子が

「御前さまあ、御前さまあ」と、下駄の音をコトコトさせて友厚に近づいて来た。「東京から井上はんという、お人がおいでです。どない、いたしまほか」

そう言う勝子には、まだあどけない表情が残っていた。

井上馨は尾去沢鉦山の払下げの疑獄事件で大蔵大臣を辞して、大阪で何か仕事はないかと相談を持ちかけて来たのだった。

時を同じくして友厚の紹介で鉦山の仕事に着手した古河市兵衛は、すぐに天下の富豪にと、のし上がっていった。後に

日本の鉦業を牛耳っていく古河財閥の始祖である。

話は相前後するが、この時に居合わせた勝子は友厚との間に明治四年、長女の武子を産む。長じて武子は九里正三郎の息子、龍作と結婚。夫の龍作は友厚の半田鉦山や全国の鉦山事業を引き継いでいくことになるのである。

後にその二人の息子、信厚は古河鉦業の経営に関わり、長女の厚子は吉田茂の甥である白石宗城、日本窒素の社長と結婚している。

このように鉦業家一族の輪が広がり、日本の主要な大企業へと発展していくのであった。

『生きている五代友厚の血』

友厚が国産藍の開発と普及に取り組み製藍所を設立したのは明治九年のことであつた。ベルギーの商人モンブランを介して輸入した機械はリズムカルな音を刻み、二千人の従業員は嬉々として働いた。

明治天皇は有栖宮熾仁親王、木戸孝允、伊藤博文等を伴って工場内を臨幸された。正に製藍事業は旭日昇天の勢いであつた。

同年の十月に敷地内の仕舞屋で侍女が

三日三晩、茶釜に湯をたぎらせて、今か今かと待っていたところに大きな産声があがった。勝子が長女武子に次いで産んだ赤児の誕生であつた。友厚は「また女か」

と言いながらも非常に喜んで「わしに似てべつぴんやないか」と何回も頬ずりをした。

その時に精魂を打ち込んでいた製藍事業にちなんで『藍子』と名付けた。このことが当時の新聞で『生きている五代友厚の血』と大きく報道されたのであつた。

友厚に付きまとう藍子

同郷で薩摩の大久保利通とは囲碁を戦わすことを楽しみにしていた。その日も友厚の築地の別邸の二階に上がった。階下からお茶を運ぶ女中に付いて、おかつぱ頭で目のパッチリとした女の子が現れた。友厚は

「どうもこの娘は親父っ子で、おいどんの、後ばかり追うから大阪から連れて来たのだよ。色の黒いところはわが輩に似ておらんが気性は、おいどんそっくりに受け継いでおる」

と言って苦笑した。

大久保は女兒の頭を撫でながら

「ずいぶん大きくなったねえ。たしか、あ
いこちゃんと言ったねえ。いくつになっ
たの」

やさしく尋ねると、

「あいこちゃんは三つになったのよ」

ませた口調で話す藍子を友厚は目を細
めて膝の上に抱き寄せた。菓子器に盛ら
れたカルカンに手を出してほおぼり始め
た藍子に

「わが輩は八人も男の子がいるんだ。大き
くなったらお嫁さんにもらおうかなあ、あ
いこちゃん…」

ほほ笑ましいやり取りが続いた。

友厚は藍子を階下におろした後、二人
はいつものように夜が更けるのも忘れて
囲碁に興じた。後で思えばこれが二人の
最後の交歓であった。その翌日、大久保
は元老会議に行く途中、無残に暗殺され
た。明治十一年『紀尾井坂の変』であつ
た。友厚は世の中の不穏な情勢に動揺し
ながら、沈痛な面持ちで「ヤッコちゃん」
と名付けていた愛犬のチンといつしよに、
無邪気に飛び回る藍子を眺めているのが
いちばんの慰みであった。

友厚の臨命終時

藍子は大阪の愛日小学校に入学した。
読み書きの勉強はたいへんに良くてきた
が、やんちゃ娘であった。カエルをつか
み、切れた鼻緒の下駄を提げて裸足でペ
タペタと歩いて帰って来る藍子を、義母
の豊子はずいぶん変わり者扱いにした。
そんな藍子を五歳年上の姉の武子はいつ
も優しく見守っていた。

友厚の持病だった糖尿病は四十九歳の

頃から悪化していった。妻の豊子に

「武子はいくつになったのかなあ…」

「十四ですわ」

「それでは藍子はいくつになるのかなあ…」

「まあ、藍子の年までお忘れになつて…」
と豊子を不安にさせてしまふのだった。

友厚は尋常でない死に方をした盟友西
郷隆盛、大久保利通、中野伍一の夢にう
なされる日々が続いた。ついに東京で陸
軍医橋元本部長のもとで治療に専念す
ることにした。東京築地の別邸に発つ朝、
大勢の使用人が並んで見送る玄関の石畳
に、藍子が突然飛び出して来て、

「早く帰って来てね、おとうちゃん…」

「人形を、買って来てあげてからお利口し

て待っているのだぞ」

友厚は腰にまとわりついた藍子を優し
く抱き上げたが、もう肩で息をする状態
だった。

東京に着いた友厚はしばらく落ち着い
た日が続いたが、病状は急激に悪化して
寝たきりとなつて入院した。病室では豊
子夫人や長女武子をはじめ、松方正義、
西郷従道等が見守つた。死期が迫り深い
憂いにつつまれた中で薩摩の友人税所篤
は思いきつて聞いた。

「五代どん、後継ぎはどうするでごわす
か…」

友厚はか細い力のない声で

「事業のことはいっさい松方君にたのむ…」
と言つて目を閉じた。朦朧としている

自分の意識に鞭打つて

「わしの後継ぎは九里龍作にしたい。武子
が十五歳になったら龍作を婿養子にして
もらいたい。藍子は…、あ、い、こは…」

と口ごもりながら昏睡状態に陥り、二
度と目を覚ますことはなかった。

明治十八年九月二十五日、大阪は朝か
らしとすると雨が降り、何となく淋しい
予感のする日であった。雨があがった頭

上には五羽の鳥が鳴きながら低い旋回を繰り返していた。

「おかあちゃん、なんでこないにカラスが鳴くの…」

「どないしたのかしらねえ…」

と勝子も不吉な思いが隠せなかつた。夕暮れの鐘の音に、ふだんはきかん気の藍子も、ついには庭石にしがみついて泣き伏してしまつた。そこに友厚死亡の電報が届いた。

藍子が九歳の年であつた。

向学心に燃える藍子

友厚には武子、藍子を含めて二男四女の腹違いの子供がいた。五代家では何かと家庭内騒動が起こり、豊子の勢力が以前にも増して強くなつていった。

友厚の遺言通り、武子は龍作と結婚して、龍作は福島半田鉦山の事業を継いだ。

年ごろになつた藍子は豊子との間に些細なことまで争いが絶えなくなつていった。そんな日々の中で徐々に腹を決めていた藍子は

「お姉ちゃんのいる、福島に行きます」ときつぱり言い放つた。

母の勝子は惜別の情に苦しみながらも

姉武子のもとならば、と見送つた。

武子夫婦を頼つて遠い福島に身を隠した藍子は、龍作の居間にある法律、鉦山、文学などの本を片端から読み漁り向学心に燃えていった。十六才になつた頃、福島から単身で上京して仏英和女学校に入學した。龍作の援助のおかげで八年間、フランス語課程で学び、抜群の成績で終了することが出来た。日本人の生徒は西園寺公望の娘の新子さん、箱根の富士屋ホテルの山口孝子さんの三人ほどで他は多くが外国人であつた。

後々の話ではあるが大正八年、新子さんはベルサイユ講和会議に出席する公望に同行して、流暢なフランス語を披露している。

また、富士屋ホテルの孝子さんもやはり英語、フランス語が堪能で外国人の多い富士屋ホテルの華だった。

藍子は新子さんをお新ちゃん、孝子さんをお孝さんと呼んで、お互いに良き話し相手であつたが、彼女たちの生きる道は三人三様であつた。

藍子は政界でトップの伊藤博文や頭山満、財界の名士達からも

「藍ちゃん、藍ちゃん」

と呼ばれ、五代の令嬢としてかわいがられたが、その優しい声や目鼻立ちのはつきりとした顔立ちとは裏腹に、断髪に男下駄という、いわゆる宝塚の男装の麗人のようであつた。

その頃、東京に移り住んでいた姉の武子は

「藍子さんつたら、また、男下駄を履いて…」
「藍子さん、また髪を短く切つたのですか…」

とたびたび嗜めたが藍子は一向におかまいなしだつた。

「ボンジュール・マドモアゼル・アイコ」
らせん階段の上から、水兵服を着た武子の子供友邦、信厚、厚子の三人が手を振りながら駆け降りて来た。藍子は彼らにフランス語を教えていたのだ。他にも久原房之助の子供達や松方正義の正妻と愛人の間にできた二十三人の子供達に、英語やフランス語を教えていた。藍子が松方邸を訪問するたびに、松方は親身になつて幾度となく結婚の話を薦めた。

「あら、松方のおじさま。あの華族女学校の津田梅子先生は『私には結婚の話を二

度としないでください』と、はっきりと仰言つて、皇居のお堀にカエルの卵ばかり見に行かれるそうですよ」

津田梅子がカエルの卵の研究をしているのを例にとり、話をそらせるばかりで、早くから独身を宣言して松方をヤキモキさせていた。

いっぽう、政財界の社交会に頻繁に出るようになった姉の武子は、誰もが振り返る美人で鹿鳴館の花形だった。双方に姉妹という面影はまったくなかった。

存命中の友厚は唯一、中江兆民を「先生」と呼んで尊敬していた。友厚から兆民の話をよく聞かされて育った藍子はどうしても兆民に会つて見たくなつた。東洋のルソーと呼ばれていた兆民は東京でフランス語塾を営んでいたが、その頃は病に冒され唄で療養を余儀なくされていた。兆民は著書『一年有半』に

《七月十三日故五代友厚君の遺子其女東京より小山久之助君の書翰を齎して来たり、かつ面会を乞ふ。余声全く嘖し談話すること能はずといへども、小山の書翰を見れば、仏蘭西学に従事し余に面せんと欲することここに久しき旨に付き、

これを座に引き、強いて声を絞りて一、二語交へたり。》

と記している。

東京で先端的なモダンガールで美少女だった友厚の遺娘、藍子に対して慈愛をもつて会つたのだった。

兆民は存命中の友厚に会う時は、いつも娘の千美を連れて来て、弟子の幸徳秋水に子守をさせていた。その千美は後に政治家の竹内剛との間に吉田茂を産んでいる。

藍子は父と兆民の縁故をたどつて、たびたび千美宅を訪れ、在りし日の友厚を語り合うのをとても楽しみにしていた。

下田歌子との出会い

下田歌子とは岩村の儒道家の家に生まれた平尾鉦のことである。幼少の頃から和歌や漢詩を詠む才能を買われて宮中へ出仕することになった鉦は、皇后・美子から寵愛を受けて『歌子』の名を賜つた。

皇女教育のために欧米視察を拝命した歌子は西欧のキリスト教の信仰が個人の自立と博愛の精神を育み、教育や生活の基盤となっていることに大きな感化を受けて帰国した。

妖婦とうわさされた歌子は伊藤博文、山縣有朋等、高官との間に醜聞が絶えなかつたが、そんな悪口雑言にも凛として立ち振舞い、女性教育ひとすじに力を注いだ。

松方正義は多忙となつた歌子に語学の堪能な藍子を弟子として、また秘書として紹介したが、すでにハッキリとした西洋思想が身に付いていた藍子は、古風なしきたりを残すところもあつた歌子とよく口論になつた。

「藍子さん、いちど妙心寺で精神修養をなさつて来たらいかがですか…」と奨めた。

しぶしぶ京都の妙心寺に出かけて座禪を組んだ藍子は左肩が揺れただけで、警策でバシッ、額を見つめていただけでバシッとたたかれ、禪の境地もつかめないままに早々と無断で帰つて来てしまつたのだった。

「まあ、藍子さん、もう帰つたのですか…」

驚く歌子に

「精神はつかみどころがなくて、私には到底、理解できませんでした」

と応える藍子だった。しかし、歌子は

藍子の人にはない強い信念を貫く、奇特な人間性に惹かれていくのだった。そのころ、歌子は実践女学校や学習院女学校に深く関わり、日本の女子に教育の機会を与え、主婦の地位向上、生活の改善を図るべく奮闘していた。そろそろ還暦を迎えようとしていた歌子は藍子を書齋に呼んで、こう懇願した。

「私の養子になってくれませんか…」と。

即座に首を横に振った藍子は

「下田先生、私には以前から抱いている大きな夢があるので…」

藍子の思いは、まったく別の所に向かっていたのだった。期待を裏切られた歌子は落胆のあまり病に伏したともいわれている。

ドクトル・ベルツとの会話

藍子は東京でドクトル・ベルツに会った。

その時、ベルツはあご髭をかきながら、目を閉じたり上を見たりして、思い出すように神妙な顔つきで藍子に話した。

「五代先生が糖尿病で目が悪化しつづあ
る時、『わしの家業の鉱山を受け継ぐ者
は藍子のような気がする』と話されまし
た」と。

この話を聞かされてたいへん驚いた。ベルツの言葉は藍子の思いに拍車がかかり、日増しに熱くなっていくのであった。

その頃、半田鉱山では天災や人災で鉱山の崩壊が相次いでいた。それに足尾銅山では公害の問題が噴出して社会的に深刻な問題となっていた。藍子はそのような世の中の情勢を十分に把握していたはずであったが高まる思いは、もはや自分でも止めることはできなかつた。藍子は後に日本女子大学の学長となる親友の井上秀に

「三重の治田という所で鉱山事業をやらう
と思うのよ」

と打ち明けた。続けて尋ねるように
「以前、加島屋の広岡浅子様と九州の炭鉱
を見に行った、と話していたわよね」

秀は女学校時代に広岡の娘、亀子と級友だつたが、秀のその優秀さと向上心を広岡に認められ、東奔西走する広岡に頼みこんで、九州の炭鉱にも随行したことがあったのだった。

「藍子さん、これからの時代は女性が仕事を持つことは素晴らしいことと思つわ
でもね、炭鉱や鉱山はやはり並大抵なこ

とではないのよ。広岡様は御家庭の事情で炭鉱に手を出すことになられたが、荒くれの坑夫達と寝起きをともにして渡り合ふのに、いつも懐にピストルを入れていたのよ」

「そんなの驚かないわ」

藍子は昂然と言いつつ。

「石炭ならまだしも、鉱山となるとねえ…」

秀は強い不安で顔を曇らせた。

「父友厚の遺志を継ぎたいのよ。ずーっと温めていたら、いつの間にか四十歳を過ぎてしまつたわ」

藍子は体裁が悪そうに笑つた。

この話を知つたお孝さんも、何通もの手紙で諦めるように説得にかかつたが、「もう、覚悟は出来ているのよ」

藍子は取り合わなかつた。

近江の富豪小林吟右衛門でさえ破綻をきたした鉱山であつたが、藍子は小林を京都の別荘に訪ね、過去に友厚が小林に渡した治田銀山の採掘権の譲渡を申し入れた。同年に三重の治田を訪れ、村有土地貸借契約書を『五代アイ』として結んだ。

徳三の大八車

大正八年三月、藤原岳の頂上には、ま

だ白い雪が残っていた。山裾のセメント工場の採石現場からは時々、発破の音が遠雷のように響いた。石灰岩の白い砂煙が舞い上がると、その後は何もなかったように、いつそう静まり返っていった。

臍脂色の軽便鉄道が熱気で重油の臭いをブンブンとさせて終点の阿下喜駅に着いた。そこに下駄を履いた五代アイが降り立った。五代家からの配慮でアイが侍女と呼んだウメと一緒に。ウメは大きな緑色の風呂敷包みを背負っていた。改札口には藍色の股引姿に草鞋を履いた徳三が迎えに来ていた。徳三は頬かぶりをしていた手拭いをほどいて両手に丸めた。

「五代さんですなあ。疲れなきましたですやろ」

「冷たい風ですね。」と言うアイに

「伊吹降ろし、言いますんやわな」

徳三は日常のことのように言った。

アイは疲れの色も見せず、徳三を駅舎の隅に寄せて、木綿の財布から一円札を取り出して徳三の手に握らせた。

「すみませんなあ」

ペコリと一礼した徳三は外に止めてあ

った大八車に、同時に到着して来た菰で巻いた紫檀の机を載せて手際よく荒縄で縛った。その上に三個の柳行季を積んだ。「ほんじゃ、こっちの方ですわ」

と言って、大八車のかじ棒を握った。権現坂に差し掛かった時、徳三は体を前に傾けて右に左に轍を避けながら、顔を赤らめて力いっぱい引いた。

緋の着物にがら紡服

「ご名算」

「わーい、先生、もう終わりい。」

子供達の歓声が上がった時、桑畑から青い風が算盤塾を吹き抜けた。

単衣の短い着物に、でんちをはおった子供達、がら紡服を着た子供達は、それぞれに風呂敷に巻いた算盤を肩から斜めに掛けて、ガシヤガシヤと鳴らしながら駆け出した。

「五代さんとこの、ハチを見て行こか」

「おう、行こ。行こ。子犬をもろたんてか……」

小石を拾ってアイの庭に投げ入れた。

「キャン、キャン」

かん高いハチの鳴き声がシンとした辺りに響いた。

「子供はんが、横着してかないませんなあ」

そう言いながらウメはうす暗い土間に下りて、ガシガシと明日の米を研ぎ出した。

月の光を浴びた桑の葉が鉛を溶かした波のようにゆっくりと揺れ始め、空には北斗七星がだんだんと柄杓の色を濃くしていった。アイは裸電球の、今にも切れそうなフィラメントの灯りをたよりに、父友厚の尽力によってフランスから雇用した鉱山技師、フランソワーズ・コワニエの鉱山学書を原文のまま読んでいた。

白いブラウスにニツカポツカ

アイは鉱山を手掛けるのに二十万円を投資した。先達もなく半田鉱山で義兄龍作の仕事を見聞きしただけで、それ以外は洋書による鉱山学の知識だけだった。住まいのある麓村から三キロほどの道を、東京から持参して来た真っ白な木綿のブラウスにニツカポツカという格好で、犬をお伴いに山に通った。

徳三が入つてに声を掛けた村の若者たち、二十人程が集まった。みんなは擦り切れた藍色の股引に藍色の半纏を着て、腰を紐で縛り、同じような格好をしていた。まず、大八車が通れるように道を切り

開いた。藤の花がたくさん咲いて垂れさがる『ざがり藤』に隧道を掘って道を通すことにした。坑夫達はほとんどが農閑期の二十代、三十代でノミを打つツチの音が力強く飛び交った。

太陽が沈んで肌寒くなった時、一瞬ひと筋の月の光が差し込んだ時、岩盤がゴツソリと落ちて貫通した。全長は二十三メートルにおよんでいた。

坑道の取り付け道路に『大通洞坑橋』を掛けた。三角州で出来た広場の『日の丘』に事務所を建てて、次に坑夫の飯場を二棟建てた。

トロッコ

雪の多い年だった。青川の土手の冷たい水辺に春一番のフキの薹が芽を出し始めた。アイは山のおちこちにツルハシを刺して、岩石を舐めて鉱質を確かめた。土を入れたダイスケ(竹で編んだ籠)を天びん棒で担ぐとずしりとたわんだ。火葉の掛け方にも慣れて作業は順調に進んで行った。坑内に二本のレールを敷設してトロッコを走らせた。目当ての鉱物を運ぶというよりも廃土を外に運搬するためだった。坑道の中を掘り進めると入

口から遠ざかるに従って暗くなっていた。昔からこの地に伝わるマンボの手法で、松根油のかすかな灯りを取りながら進めた。入口に唐箕を備え空気を入れ替えるのは女子衆の仕事であった。

「もう少し横、もう少し上、もう少し奥」坑夫達は毎日毎日、ダイスケを引きずって暗い坑道を這いずり回った。

あれから十年にもなる。労働は過酷なものであった。何よりも成果の出ない、不甲斐ない作業に坑夫達は一人、二人、三人とやめていった。掘っても、掘ってもめばしい鉱脈に出合うことはなかった。しかし、アイはここでやめる訳にはいかなかった。

アイの着る物は短い緋の着物にモンペ姿となり、足元にはゲートルを巻いて地下足袋という格好になっていった。雨の日は昔の笠にわたの蓑を羽織って出かけた。そんな日でも朝早くから仕事に取り掛かる徳三のツチの音が、沢の瀬音に混じってかすかに聞こえてくるのだった。坑道の入口に近づいたアイは

「徳さあーん、ごくろうさあーん」

声の反響で、その日を占うように中に

入るのが習慣となった。徳三を見付けると言い知れぬ安堵感に包まれるのだった。

ヒル、マムシ、ヘビの出没

水気を含む土壌はヒルが多かった。

「むむっ、また、やられたあ…」

むず痒い感触に足首を撫ぜると血のりがべつたりと付いた。葛の葉っぱをちぎって血を拭った。木の枝かと思つて見ると、ヘビやマムシが動き出すのだった。

「マムシだ…」

アイは一瞬怯んで後ずさりしたが、すぐに戻りツルハシでマムシの頭を叩いて殺した。そこにはすっかりと山に慣れたアイがいた。ひんやりとした夏の坑道の中でも作業に取り掛かると蒸し暑かった。坑夫達は裸になり褌だけで働いた。狭い坑道で背を屈め、腰を折って這いずり回る作業は例えようがないほど過酷な作業で、坑夫の背中は灸や膏葉の痕で真っ黒だった。

「あつ、甚さん、背中から…」

黒い膏葉の端から赤い血が滲み出していた。

「いやあ、これぐらいのこつ、家で寝っても痛いんやわな」

アイは以前、人づてに聞いた話を思い

出していた。その昔、生野銀山では坑夫が赤い禪で女は赤い腰巻姿だったという。それは多発する坑道の事故で怪我をした血を隠すためだったらしいのだ。

ある日、坑内壁を支える杭が崩れて、アイは押し潰された。それ以来、左足が不自由になってしまったのだ。それでも一度坑道に入ると、クモの巣の中をかき分けて歩き廻るほど健脚であった。山を舐めるほどに見入り、目を皿のようにして見廻り続けたが、岩盤に思ったほど銀銅の含有がないことを認めざるを得なかった。そのころ、掘り進めた坑道は六七〇メートルにまで達していた。

暗澹たる思いの中で昔掘った鉱脈の続く穴に、杭を打ち直して取り残しを採鉱した程度だった。

徳三もとうとうやめて村に戻って行った。アイが肝心の窯を築き精錬を行った形跡はどこにもなく、一〇トン程がそのまま集積されたままになっている。

軍需景気

戦争で鉄が不足になった昭和一九年には軍部からの要請で、昔に精錬して放ったあった不純物の混じるカラミの出荷要

請がきた。

兵隊前の少年達は放置されていたカラミを拾い集めた。藁で編んだカマス袋に入れて四日市の石原産業に出荷した。村の人たちが『くろがね』と呼んだオート三輪のバタバタという音が静かなやまあいかに響いた。

その時、カラミの下に三〇センチ位のムカデが渦を巻いて何匹も出て来た。少年たちが遠巻きに恐る恐る木の棒でたたいていた。そこに走り寄ったアイは手早く、オート三輪の股ぐらにあるガソリンタンクの蓋を開け、手拭いを浸して火を付け、ムカデを焼き殺した。少年たちは呆気に取られて、強いアイをしばらくの間見つめていた。静かだった山にも、いつ時だけ活気があったが、終戦を迎えると世の中の情勢は急激に変わり始めた。次々と出資者や地質学者が鉱山を訪問した

たが「普通ではとても難しい山だ」

と皆がさじを投げた。それでもアイは「いやいや、幕府のお手山の上部は荒らさ

まだまだ目を光らせながら語るのだった。山の色は季節ごとに移り変わり、豪雨の時に青川峡が荒れ狂うくらいで、鉱山の様子は何も変わりはしなかった。

毎日、男と見紛うような格好で愛犬のシロを連れ、六角棒のつえをついて出かけた。途中で菅井さんの家に立ち寄り、縁側で熱いお茶をよばれてから、地下足袋のコハゼを掛け直して歩き始めた。アイと菅井さんと使用人のたつた三人は昔、オマキという女が金を掘って裕福に暮らしていたという、この土地に伝わる『オマキ伝説』を語りながら歩いた。

「オマキのように、いかんもんですかなあ…」

「オマキとこの、井戸には金塊がどつさり隠されている、という話ですがなあ…」

「誰か見た者がいるんじゃないかなあ…」
三人は諦めとも、希望とも取れる話を口々に交わしながら、その日も鉱山へ向かうのだった。アイにとつてオマキの話は唯一の「光」でもあった。

終戦を迎え、世の中は日進月歩で移り変わり、自己資金百万円を使い果たしてアイの経済力は破綻した。ついに付いて

行けなくなったアイは執念と未練が交錯する思いの中で、迫りくる歳には抗えず、廃業を決断せざるを得なくなった。

全てが灰と化す

朝から物を焼く臭いがアイの家の周辺に立ち込めていた。アイが鉱山関係の図面や手紙を焼いているのだった。下田歌子が毎日のように書きつづつて送ってきた、セピア色になった手紙を読み返しながら、

「下田先生…」

と口ごもった。やにわに東京の生活が浮かんできたのか、アイは思いをふっ切るようにバサバサと火の中に投げ込んだ。墨で書かれた歌子の手紙はオレンジ色の炎となつて空に舞い上がって行った。醜聞的な話が多かった歌子の行状を誰よりもよく知っていたアイは、最後までその内容を口にするにはなかつた。

村有土地貸借契約書に五代アイと記入された和紙が付いた端からチラチラと燃えた。鉱山の図面は燃え上がったり、衰えたりしながら曖昧にくすぶり続け、昼ごろにはすつかり灰になった。

山中園子女史の伝道

バスの便も、まだ少ない昭和二十五年のある夕方のことだった。橋を渡り、田んぼを横切つて桑畑を通り抜け、藍子の家にクリスチャンの山中女史が訪ねてきた。山中女史とはその昔、友厚が治田鉱山の採掘権を譲り渡した近江の豪商、小吟右衛門の孫で菰野城主、土方氏に仕えた重臣の子孫でもあつた。

山中女史は身分を名のとと飲待されて家の中に通された。欄間には島津斉彬、島津久光の大きな写真が飾られていた。田舎家の落ち着いた居間の中央に大きな火鉢が置かれていた。その日は夕方遅く交通の便もないことから泊まるようにと、誘われるままに嬉しくて裸電球の下でこの話を交わした。藍子は、々として寡黙であつたが熱くなるとフランス語も混じつて、モダンな妙味が加わり相手を引き込んでしまう才があつた。

藍子はキリスト教を母体とした学校で教育を受けていたから、山中女史とはよく話が合った。その後も山中女史は十数年にわたり友として、伝道師として繰り返し訪問された。

革のトランク

晩年の藍子は情報の少ない寒村で毎日の新聞をくまなく読み尽くし、晴耕雨読の日々を過ごしていた。その頃、日本女子大学学長を辞して家政学者となつていた井上秀は自分が編集して著した本や書物を欠かさず藍子に送付してきていた。藍子は先駆者達が苦勞して勝ち取つた女性参政権、女性選挙権の行使を重んじて体が不自由になつた晩年でも公民としての態度を示し、リヤカーに乗せてもらつて投票に出かけるのだつた。

ある日、藍子は大切にしていた革のトランクを愛おしそうに膝の上に抱いて見つめていた。それは龍作がアメリカで開催された第一回国際労働者会議に出席した時の記念のトランクであつた。中には友厚の写真や書簡が一五〇点あまり入っていた。全てが歴史的に非常に重要な書物として散逸しないようにと、後に山中女史と共に国会図書館に寄贈している。

その日暮らし

藍子とウメはまれに富田港の方から魚の行商人がやつて来ると、御馳走としてメザシやサンマの干物を買うこともあつたが、自給自足のその日暮らしの生活で

あった。雨の日は電波の乱れるラジオの横つ面をたたいて調子を取り直して聞きながら、石臼で米や豆を挽き、粉にしていた。四畳半の冷たい板間でウメにおかずの品数を少しでも多く作らせて三回の食事を楽しみにしていた。

近くの谷口商店から小学生の友子さんが日用雑貨品を届けに行くと、シロが喜んで尻尾を振って飛び付いた。人の気配で家の中から出て来た藍子は庭のピワを指差して

「おじようちゃん、おじようちゃん、あれをごらんさい。今年は成り年なのよ」と喜んで、たわわに実ったピワを新聞紙に包んで渡していた。

時々、東京の甥や姪、知り合いから田舎では見慣れないハイカラなバター菓子やチョコレートが送られてきた。そんな日は庭で飼っているウサギを見に立ち寄る学校帰りの子供達に声を掛けて

「ぼっちゃん、チョコレートはいかが…」と振る舞っていた。紺のモンペの膝には白い木綿糸で何重にも縫ぎを当てていた。

藍子とウメは、三交バスで阿下喜まで買い物に出かけた。それは大阪で開催さ

れる友厚の記念式典に招待されて、そこに着て行くために紺の反物を買うためでもあった。

藍子はウメに氣遣つて

「寒うなりましたねえ、新しいコートをいかがですか…」

「そっさせていただきましょうか」

ウメはうれしそうに坂道を登つて十社屋へ足を急がせた。ウメは派手な緑のコートを買って胸に抱きしめた。生まれて初めてのコートだった。

藍子の家には時々、東京や大阪、名古屋から知り合いの学者や鉱山事業者が訪れた。もてなす食事のお金を、ウメは藍子の博多帯や紬の着物で工面していた。そのことを藍子は知る由もなかった。

胸に白いバラの花

山中女史の立案により『五代友厚秘史』の編集が急がれた。それは藍子の高齢を慮つてのことだった。ついに一九六〇年、発刊の運びとなり、式典に編集者の山中女史に付き添われて出席した。さし回された黒塗りのトヨペットクラウンで中馬馨（後に市長）とともに二十年ぶりの阿倍野斎場に墓参した。神式の五代家の大

きな鳥居をくぐると、石椁に囲まれた中央に、ひと際高い『従五位勳四等五代友厚墓』の碑があった。

徐に、碑にぬかずいた藍子の胸に去来したものは何であったのだろうか、終始無言で固い表情だった。横の『故五代武子遺髪』の碑の前では両膝をついて蹲り、しばらく目を閉じていた。

その後、大阪証券取引所を訪れた。今では歴史的建造物となった、丸くて重厚なビルの前に威風堂々と立つフロッグコート姿の父五代友厚の銅像を見上げた。父が指差す空は無限に続く青い空だった。父に何を報じたのか…。悔恨の念にかられたのか…。歳はずでに八十六歳に達していた。

一九六一年、鹿児島島の桜島を臨む陸橋

畔（友厚生誕地）で友厚の偉業を讃えた銅像の除幕式が行われた。来賓の席に黒い礼服の鹿児島県知事、鹿児島市長と並んで甥の五代信厚、胸に大きな白いバラの花を付けた紺のモンペ姿で、かくしやくとした藍子がいた。

藍子倒れる

晴れた日は四代目になるハチとシロの

二匹を従え、左右に二本のつえをついて、ボチボチと高台にある治田城跡に散歩に出かけていた。土手に腰を下ろし、湖面にスイスイと泳ぐカイツブリを眺め、鈴鹿山脈や高い空を仰ぎ、俚謡正調を吟じたり、自らも詠んでいた。

藍子は東京から訪問してくれる甥や姪、土地の川崎一郎医師、名古屋から転居してきたクリスチャンの一之瀬さん、山中女史等の来訪に首を長くしていたようだ。その日も静かに終わろうとしていた。そんな夕闇のしじまを破つて、血相を変えたウメが、鈴木家の玄関にかけ込んで来た。

「鈴木さーん、大変なことが…」
「どうしたんやなー」

「御主人が風呂で、動けなくなつて…」
ウメが泣きつくように叫んだ。

「風呂でかえー、えらいこつちやなあー」
「一人では無理やなー。隣のイチローさんも呼んでくれえー」

鈴木さんの奥さんが呼びに走つた。
鈴木さんとイチローさんは二人がかりで五右衛門風呂から藍子を抱きかかえた。「ピタピタやー、拭くもん、拭くもん」

慌てた声が飛び交つた。ぬれた体を戸板に載せて座敷に運んで寝かせた。翌朝、鈴木さんとイチローさんはリヤカーに布団を敷いて藍子を載せ、阿下喜の厚生病院に運んだ。

走馬灯のように

藍子はクレゾールの匂いのする病院の白いベッドに横たわりながら、ドクトル・ベルツと云つた日のことを思い出していた。治田に来た時の青くて高い空。

かけ回るシロとハチ。

庭にすずなりになつたあかい柿。

ピカピカと光り、ウナギのように横たわる鉱脈の幻影にうなされた日、青川の瀬音が夢か現か、耳鳴りのように続いた。

藍子はこの治田で自らの身の上を何ひとつ語つて来なかつた。村の人々は「エライ人の愛人の娘さんらしいなあ、なんで鉱山なんやろなあ…」

藍子のことを、それ以上知る人は誰もいなかった。

ある日、治田の藍子宅にモンテンルパで日本人戦犯の釈放に尽力された米人宣教師、ネルソン博士が訪ねて来て話をされた。

「世の終わりというのは、人々が創造主に無関心になる世相が現れた時もその兆しです」

重ねて

「神の国とその義を求めよ」と話された。

藍子の頬に止めどなく涙が流れた。

武子似の甥の五代信厚はその当時、古河鉱業の相談役を務めていた。夫人のイサ子さんは世界的な数学者、藤沢利喜太郎氏の長女だった。外国暮らしの長かつた家族はみんなが熱心なプロテスタントの信者だった。イサ子さんは東京から治田の藍子を訪問するたびに

「みんなが猛反対しましたのよ、バクチみたいいな鉱山だなんて…」

と周囲に打ち明けながらも、目前に老いてゆく藍子とウメを見守つた。信厚は金銭面から二人の生活を援助し続けた。

末期の水

春先の温かい日だった。障子越しに梅の枝が影絵のように映つていた。

藍子は話し友達だった地元の川崎一郎医師に看取られて、一九六四年四月に永眠した。八十八歳だった。ウメは土間から藍子の白い飯茶碗に水を入れて戻り、

水に浸したガーゼで静かに藍子の口を湿らせた。そして五代家に伝わる「抱杏葉」の家紋印のある白い布で静かに藍子の顔を覆った。

「クウウン、クウウン」

シロの鳴き声は夜通し続いた。

翌日の正午、出棺の半鐘の音が春かすみの中に流れると、組の人たちの手によって野辺に送られ、さんまいで茶毘に付された。墓も戒名も無い。

白い月

二〇一五年九月、七回目となった青川峡を訪れた。山の秋は早かった。

銀色の波打つ芒原にハゼの葉が紅く染まっていた。今もアイが使った茶色く錆びたトロツコの車輪がこの山のどこかに眠っているはずである。

たそがれの空を仰ぐと、立待ちの白い月に『女ヤマ師・五代アイ』のツルハシを上げる姿がおぼろげに浮かんでいた。

(了)

参考文献

『治田村誌』
『治田鉦山誌』

近藤本著
黒川静夫著

『企業家 五代友厚』 小寺正三著

『五代友厚小傳』 西村重太郎著

『五代友厚秘史』

五代友厚追悼記念刊行会

『ミカドの淑女』 林真理子著

『凜として』 仲俊二郎著

『一年有半』 中江兆民著

『土佐堀川』 吉川智映子著

『津田梅子』 大庭みな子著

お会いして話をうかがった方々

岡正文様 七十四歳

鈴木久生様 七十?歳

アイの家の地主

鈴木初子様 九十一歳 アイの隣人

菅井繁明様 九十三歳

父がアイに鉦山を案内した

治田新町で出会った男性 九十六歳

図らずも執筆中にNHKの朝のテレビドラマ『あさが来た』が放映され始めた。

五代友厚の遺功を称えるとともに、父の遺志を継ぎ、女性の身でありながら一途に鉦山の夢を追った娘、五代藍子をごに偲びたい。